

演心力～広げよう演劇の輪～

講評速報 13号

12月26日(木)

【岐阜】

長良高等学校

ドリアン・グレイの肖像

「若く美しきドリアン・グレイ」

舞台はイギリス。世界一の美貌を持つと言われる純粋な娘「ドリアン」の悲哀と破滅の生涯を綴った物語。

時代背景に合わせた演技や衣装、小道具の使い方が上品さを演出できていた。

特にドリアンの肖像画は、ドリアン本人を表していて、彼女が変化していく過程を映し出し、観客に分かりやすく伝えていた。また、話し方に抑揚をつけることで上流階級の会話のイメージをうまく作り出していた。

舞台装置はシンプルだが配置が巧みで、観る側にも室内と室外の区別が自然についた。また、花道にシルエットを映し出す演出によってドリアンの頭の中を表していることがよくわかった。

客席から発したバジルとヴィクトリアの声は、一瞬だが、観客の目線を舞台上から反らす役割を果たし、舞台に目線を戻したときのドリアンの死をいっそう際立たせていた。

ドリアンの台詞にある「私、変わりたいの」という台詞について、彼女は自分自身の生き方や性格を変えたかったのではないかという意見が出た。それはドリアンが持つ価値観とも深く関わってくる。中心事物となる3人の女性は人生や美に対してそれぞれ異なる価値観を持っている。ヴィクトリアは「人生を楽しむ」ことを優先し、バジルは「純粋で汚れのない美」を追究する。それらに対し、ドリアンは「若さと容貌」へのこだわりが強い女性である。そして、自分を輝かせ崇拝し快樂を与えてくれる人間だけを傍に置こうとする。その結果、ドリアンのことを真に思っていたバジルはドリアンのもとから去り、ドリアンを唆(そそのか)すヴィクトリアが傍に残ることになる。このことがドリアンの破滅につながる一つの要因として作用しているのではないか。

「私はずっと若いままで、この肖像画が代わりに歳を取ってくれたらいいのに！」という彼女の願いどおり、彼女の老いは肖像画がすべて肩代わりするようになる。気に入らない人間は拒絶するというドリアンの身勝手さは、周囲の人間を傷つけるだけでなく彼女自身をも内側から蝕(むしば)んでいった。肖像画の変化に怯えながらも見ずにはいられないドリアンの哀れな姿は、いずれ訪れるであろう悲劇的な結末を観客に想像させた。

「過去に犯した過ちは二度と消えることはない」「他人を不幸にした者は必ずその報いを受ける」「本当の自分から目を反らしてはいけない」この劇から私たちは様々なメッセージを受け取った。